# 第 1 回 松本市森林再生実行会議 議事録(全文)

R3.7.27(火)18:00～20:30
松本市役所 大会議室
()内は発言者、敬称略

（事務局）

皆さんこんばんは。定刻となりました。渡辺委員さんが仕事の関係で、10 分ほど遅れてくるということで連絡がありましたが、ただいまから第 1 回松本森林再生実行会議を始めます。初めに、委員の皆様への委嘱ですが、お手元に、委嘱状配布しております。任期は本日から、施策の検討が終了するまでの間となっておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは初めに、臥雲市長からご挨拶を申しあげます。

（市長）

皆さんこんばんは、この度は松本市森林再生実行会議の委員就任をお願いしましたところ、快くお引き受けいただきまして、誠にありがとうございます。この会議は、昨年、四賀の松枯れ問題を検討していただくにあたりまして、これは単に地域の松枯れ対策にとどまらない松本市全体の、森林の保全、活用、再生、そうした観点で考えていく必要があるということで、専門者の皆様に、集まっていただいて、半年あまりに渡る協議を重ね、提案をいただきました。

その提案を、今度は実行に移していく、それはさらに、市民の皆様にも理解をし、参加をしていただく中で、松本市の、森林の保全、再生を進めていく、そのための会議として、今回新たに、委員の皆様に、就任をお願いしたものであります。

森林資源の活用、そして林業の振興など、様々な課題が山積をしていて、短期的に取り組むべきもの、そして、中長期的に検討していかなければいけないもの、そうした多角的で、複層的な問題について、ぜひとも、皆様方に専門家の視点から、また、市民参加の観点から、ご検討いただいて、これから、松本市の、森林を保全、活用、再生に有効な対策を打ち出し実行に移していきたいと考えております。

2050 年までの CO2 排出量の実質 0 といったことも、これは松本市も、あるいは日本も世界も、掲げておりまして、これまで以上に、森林のあり方をめぐる議論というものは、市民生活にも直結し、重要性を増すという風に考えております。再生可能エネルギーの活用といった観点も視野に入れまして、地球の持続的発展、こういった取り組みを市民の皆さんとともに、進めていけたらと思っております。

是非とも、限られた時間でございますけれども、皆さま方から有意義な知見をいただきますよう、お願い申しあげて冒頭のあいさつとさせていただきます。よろしくお願いいたします。

（事務局）

本会議の座長及び座長代理につきましては、要綱第 5 条で、委員の中から市長が指名する

ことになっております。あらかじめ座長に香山様、座長代理に三木様を指名しております。代表して、香山様にご挨拶をお願いしたいと思います。

（香山）

森林再生実行会議の座長を仰せつかりました。香山です。この実行会議という名称がですね、実行ということと、会議っていうのが重なってまして、なかなか不思議な会議になっています。もともと、昨年度私も関わりまして、やらせていただきました検討会議の提言というのがありまして、この提言が、実際に実行されなければ、提言で終わってしまうんですが、これをどうやったら実行できるのかという、その課題が、今年から始まっているわけですが、実行を具体的にどうやったらいいかということの会議で、おそらくそういう意味だと思うんですね。

ところが、現実の問題として、森林のことというのは日々動いていまして、別に会議をしなくても、すでに、提言の後にその他の森林政策というのは実行されています。当然の話ですね、提言があって、じゃあ次何やりましょう、1年間検討して、その結果として実行しましょうってそれは余りにも遅過ぎて、常に、森林、まあ生きているところですから、実行されている、この夏の暑さの中で、いろんなとこでまた新たに松が枯れるでしょうし。或いは、台風が来れば木も倒れる、いろんな状況がこれから起こってくる中で、森林に関わることというのは、会議して決まって実行するってそういうことではなくて、日々実行という中であえてここで実行会議というふうに、名前をつけていくというのは。

そうは言ってもその提言を実行していくというのはそんなに簡単なことでは無いんだな。つまり今までの林政、あるいは松本市民の生活から非常に離れてしまっている松本の森林を具体的に、提言に乗ったような形に持っていって、本当にその森林の再生を図っていくということは、提言書出ましたじゃあこれで行きましょう、そんな簡単にはいかない。そういう意味で、今年度こういう形の会議の中で、具体的に提言に盛り込まれているものが、じゃあ具体的にどうやって実行できていくのかっていうことの、段取りをとっていくっていうんですかね、そういうための集まりだと私は考えます。実際の政策の実行にあたっては、もうすでに市の方がそういう形で動いておられるし、或いは林業の現場というのが、これも止まらず動いていますが、動きながら考えていく動きながら修正していくということが、まず我々の任務としてあるわけで、これは別にこの会議でなくてもそうなんですけれども。

さらに具体的な政策というのは、予算というものがなければ動かないところもありますから、予算を組まなきゃいけないものについては来年度からということになるんですよね。その来年度の予算の進み方、組み立て方っていうことについての提言に即した、ちょっとその具体的な方法というのがここから出てくれば良いのではないか、もちろん予算にかかることを、最終的には議会で認めていただくことだし、また多くの市民がそれを見ているということだと思います。

今回ここにお集まりいただいたのは、もう私は現場の専門家、三木先生は、研究という立場での総合的な専門家、小山さんは、長野県の職員という、行政という立場もありつつも研究者である、そういう形での専門家。そして渡辺さんは、むしろ専門家というよりも、市民

として、森林に深い関心を持っておられる。松本の森林が市民としてどういうふうに動いていくのかというところを、ここに来て一緒に話に加わっていただいて、来年以降もっと広い市民が参加した、何かしらの協議会ができてくるわけですけれども、そこに向けてのステップになっていけばいいのではないかなと、そんなふうに思います。その形で、今日まさにこの会議をどう運営するかってその話も大きな議題になってますけれども、私からのお話はここまでとしたいと思います。よろしくお願いします。

（事務局）

ありがとうございました。それでは次に、委員の紹介に移ります。今回 4 名の皆さんに就任をしていただきました。初めに、長野県指導林業士、香山由人様。続きまして、信州大学学術研究院農学系助教、三木敦朗様。長野県林業総合センター指導部課長補佐兼林業専門技術員技術員、小山泰弘様。ソマミチ一般参加者代表、渡辺美沙樹様。以上 4 名です。よろしくお願いいたします。

ここで市長は、他の公務のため退席となります。傍聴の皆様へ、ご案内いたします。本日の会議の終了は、8 時 30 分を予定しております。スムーズな会議の進行にご協力をお願いいたします。また会議録作成のため、録音させていただきますので、ご了承ください。それでは、会議に移ります。ここからは香山座長にお願いしたいと思います。

（香山）

はい。それでは、会議に入っていきたいと思います。会議といってもですね、広い部屋で事務局の方が大勢いらして、傍聴の方もいらっしゃる中ですが、あくまでこの中の 4 人の会議ということですので、もちろん周りを無視するわけではありませんが、もっと気楽な感じで、ちょっとお茶飲みながら話してくっていうそんなようなノリになっていければいいかなと私思ってまして、実際今回来ていただいている皆さんそういう話ができる方だなと、私自身思ってますので、あまり肩肘張らずに進めていきたいと思うんですが、そうは言っても、ここの場に、どういうつもりで、何を期待して、或いはどういう不安があってきているのか、ていうその辺、会議に取り組む最初の気持ちというか、或いは姿勢であるとか、その辺のことから、まずは、皆さん一人一人から、少し簡単に話していただければいいかなと思います。座長代理というところになっていただいていますので、まずは、三木さん、この辺からお願いします。

（三木）

はい。信州大学の三木です。何を期待してというかですね、まず、この会議に呼んでいただく前に、松本市の、去年の森林再生に関する提言というのを拝見しまして、その中で、一番最後のところに、松本市の森林再生市民会議っていうのを作るんだというふうなことが提言されていました。このような時に、松本市すごい前に出てるなというか、進んだことやってるなというふうに思いまして。

というのは、国連で 2018 年に作られた、「小農（と農村で働く人々）に関する権利宣言」、

というのがあって、その中で小農、農民と言ってるのは、農業だけではなくて林業やってる人も含めて、あるいは農山村に住む人を含めた話なんですけれども、そういうふうな人達っていうのは、その地域の森林とか農地とか、そういうふうなものがどういうふうに利用されるのか、どう管理されるのかっていうことに対して、きちんとその自分の意見を反映させるっていうのは、権利があるんだというふうに言われていて、それが、世界で、国連でもそういう宣言が出たということで、日本国内でいうとそれを実践するっていう、その方法を実践する一つの契機になるのかなというふうに思ってですね、これすごい時代に即した提言だなというふうに思ってました。

その期待もありながら、しかし、松本市の中ではですね、松枯れが非常に進んでいるっていう問題もありますし、それから、木質バイオマスエネルギーを、例えば個々の家で使っていくっていうふうに考えたときも、以前ちょっとうちの研究室で学生が調べたことがあるんですけど、薪を使うときに広葉樹の薪を使う人が、松本盆地は多くてですね、上伊那の方では、アカマツ、カラマツの薪は普通に使われているんですけど、あまり松本盆地だとそういう習慣がない、まだ作られてない。というふうなことで、そういう中で、市民と森林との関わりっていうのをどういうふうに深めていけばいいのかっていうのが、ちょっとまだわからないところがあって、その辺りが不安というかですね、一緒に考えていきたいなというふうに思っております。今のところはそんなところです。

（香山）

ありがとうございました。それでは、続いて小山委員お願いします。

（小山）

林業総合センターにおります小山と申します。今回ですね、香山さんの方からお話をいただき、松本市で提言書を作る時に私どもの研究担当の戸田というのが関わってたと思うんですけども、そういう形で関わりながら実際にその提言ができてどう動いていくのかということになってきますと、提言書の中にもあったかと思いますけど、どういう人材を育てて誰がやっていくのか、

それは当然市民がやっていくんだよという市民会議ってのは先ほど三木さんの方からお話あったんですけど、その市民会議をどのように、ハンドリングしていくのかという部分が非常にこれから考えていかなきゃいけない。実際に森林を再生していく皆さんのいろんな思いを形にしていくっていうのは非常に難しいのか、この提言書でも読ませていただく中で、松本市の森林を再生していって最後の姿はどんな森にしたいのか、残念ながらこの提言書の中ではまだ見えてこなかった。

では、どんな森を作り上げていって、これからそのためにいろんな人を育てていって、市民と一緒になって、そういう目標がずれていくのは当然なんでしょうけども、じゃあどのようにこれから考えていけばいいのかなという、そのロードマップを作っていく部分では少しご協力ができるのかなっていうことをちょっと思いまして。

逆に言えば、じゃあどうしていくんだって全部がブラックボックスなので、まだ私自身も、さあどうするかって、この場に来てまだ悩んでるところではありますけれども、全体をちょっと見据えながら皆さんと一緒に協議させていただければいいかなっていうふうに考えて

おります。まずはその辺からお話をさせていただきます。よろしくお願いいたします。
（香山）
ありがとうございました。では渡辺さんお願いします。
（渡辺）
はい。ソマミチ一般参加者代表の渡辺美沙樹と申します。私もともと、長野県出身ではなくて埼玉県出身で２年前に、松本に移住したばかりなので、まだ松本市のことも、まだ知らないことばかりなんですけれども、もともと木が好きで、そういった関係で、今回香山さんからお話をいただきまして今回会議に参加させていただきました。
松本に来た理由も自然が好きで、木が好きなのと、以前働いてたときに、木の関係の仕事をしていた時に、日本は自然に恵まれているのに、やはり木に関わっている人の人材が不足していることだったりだとか、木に対する関心を持っていない同世代とかがいたりする中で、自分自身が、自分の子供とか、孫の世代に、木や森を残していくためにはどうしたらいいのかなってすごい自分の中で、もやもやして何かしたいけどどうしたらいいのかわからないというときに今回このお話をいただいて、すごくいいきっかけができたなと思います。
この提言書も読ませていただいたんですけれども、先ほど皆様がおっしゃっていたように、誰かがやるっていうのではなくて、自分自身が森や木に関心を持って、松本市民の方々と一緒に、これからの松本市や木に関わることを、一つ一つ身近に感じてもらえるようなことができたらなという形で、そのような話も皆さんと一緒にしていける時間になればいいなって思います。以上です。
（香山）
ありがとうございました。最初に話しておかなければいけないのは、この集まりの一つのゴール、というのはどの辺にあるのか、ということなんですが、一応今年度中にやるということは決まっているのですが、どこまで行かなきゃいけないのか、何をやらなきゃいけないのかということですね、実はこのシナリオもはっきりまだ書かれていません。これが実は昨年度の専門家の会議でも特徴だったんですが、事務局の原案があって、それについて検討しましょうということが、この手の会議、非常に多いんですね。
ところが、それをしないというのが去年のスタイルで、始まったときに随分周りの方から心配されまして、一体全体どこへ着地するんだと、どうなるんだと、そういうことを非常にご心配いただいたんですが、何とか提言書という形に着地ができました。今年のこの会はですね、そういう点では、これだけのことをやりましょうっていうふうにはっきりはしていないです。
ただ去年と違うのは、提言があるということですね。だからこの提言をベースに、この提言について、どういう形で、話をしながら、提言の読み解きみたいものですかね、そういうことをやりながら、やっていく、この会議自体がもうすでに発信なので、形としては、昨年度と同様に、この会議の内容の要約というものが、公開されながら進んでいくってことになると思うんですが、そういう点では、今この瞬間の話もすでに今、話されたことも、そういうふうに入ってるんですね。私がこの会議への取り組みとして考えてるのはそういうライブ感のあることをやっていきたい、それができるメンバーであるというふうに思っていま

す。

その進め方の中で、事務局の方ともうすでにいくつか話してるところもあるんですが、我々４人でこうやって進めはしますが、必要に応じて、ここに、オブザーバー的というか、アドバイザー的というか、今回の話このテーマについてはぜひこの人に来ていただきたいということもあればですね、そういう方にも参加していただいて、一緒に検討していくと。検討したことが直ちに発信になるという性質のものなので、そういうことをやりながらダイナミックに持っていければいいんじゃないかなというふうに思ってます。

あと、進め方のそういう点で言うと大きなガイドラインとして、この提言自体があって、その提言について端から順番にやっていくのか、或いはどこかテーマを絞ってそこからやりながら展開していくのか、いろいろな方法はあると思うんですが、まずは、今日その話を少し、できればいいかなというふうに思ってます。

いずれにしても、その動き自体が、一応この４人の委員ではあるんですが、いろんな外からの声、もちろんこの会議の場にきていただくっていうだけでなくて、そもそも、予定されてる会議の回数ってのは５回ほどだと思うんですが、その隙間の時間は十分ありますから、そこの中でも、我々委員 4 人ももちろんですし、さらにいろんな方との意見交換、いわゆる、ここの会議以外でもやりながら進んでいくんだろうというふうに思っています。そういう点で言うと、実は委員の皆さんの負担ってのは結構多くてですね、多分私の方から、いろんなことを常に振るんではないか。

それからもう一つ、この進め方のスタイルとして、そのライブ感の持続性って言うんですかね、必ず次回はこういうことやりましょうっていうことを決めていくという、というのが、今この、まだこの瞬間で次回は決まってないんですね、ただ今日これから 8 時半までの話の中で、次回はこんな形にしましょうって、そしたらゲストとしてこの人がいいかねみたいな、そんなところまで持っていく、そういう日々の進め方ができればいいかなというのが、今、私の考えてるところです。

これはあくまで私の考えていることなので、やりながら変わるかもしれません。ただ、どこまで脱線してもいいんですが、脱線しきらないガイドラインがあって、それはこの提言なんですね。つまりこの提言の実行のための会議だってそこは外せないと思いますので、そこの中で、これを進めていく、そういう点では私のここへの取り組み方はそういうライブ感のあるところをうまくコントロールしながら、脱線しすぎないようにしながらでも、ぜひ３人の委員の皆さんには思いっきり、この提言を叩いて、ただしこれはもう壊すわけにはいかないですけど、一応あるので、叩いたら何が出るのかなぐらいな感じで、いろいろ意見交換ができればという様に思っています。

そうは言ってもですね、どこから切り口を持っていくのかという、最初に何の話をしたら一番面白いのかなっていうところがあると思うんですね。提言の章立て松枯れから始まってずっとそうなってるんですが、その章立てで行くのかそれとも最初にこの話からしたらいい、その辺の取っかかりっていうのがあるのか、その辺について、率直な感想というか意見っていうか、私は実は持ってるんですが、私から言い始めないほうが方がいいかな。例えば小山さんどうですか。

（小山）

今ちょうど３人の方のお話、私以外の３人の話を聞きながら、すごくこの提言書と一緒に思っていたのが、結局最終的にはこの提言書って、市民でやるんだよね、っていうキーワードだけど、今のところ間違いない、市民の皆さんがやっていただく、要するに後ろに座ってる事務局の人がやるわけじゃないねっていう共通理解。じゃあ市民の人たちが、やれることって何だろう、どういうふうに考えて行ったらいいだろう、ていうとこが多分最初のキーワードになる。

じゃあ、市民ができることはこれだよね、提言の中で市民ができることってこんなことじゃないかなということですね。で、こういうサポートがあればこんなことができるよねって膨らましていくことで、例えば一つの切り口にならないか。そうしていくとその人たちが作る森づくりってこんなゴールがあるんじゃないっていうところですね、

そういうところが一つの最初のきっかけになると。いろんなそこからはこの提言をどういうとこに生かせるのか、最終的にはこれ、どうも見ていくと、環境政策でありその松枯れから始まっていろんな環境政策になって、課題として残ってるのは人づくりだよねって、これどっちかいったらリーダー的な人のことを、この提言では語ってるんですけども、それを受けて多分最終的には私たちが努力するっていう、自分たち市民のアクションなのかなと、市民として、実は市民と言っても渡辺さんしかいないみたいなんですけども、正確な市民は渡辺さんしかいないみたいで、あとは外から関わるような市民かもしれないですけど市民レベルで考えたときに何からできるのかなって言うことを、ちょっとキックオフで考えたらいいかなって思いました。

（香山）

そうですね市民レベルで市民会議を作るという、一つの多分、今年度中には、その体制を整えて来年度には市民会議が立ち上がっているだろうなという、そういうイメージがありますから、そういう点ではそこだけをどうしても押さえたいところ一つだと思いますよね。いきなり振りますか、渡辺さん松本市民唯一なんですけれども。

（渡辺）

あ、今回のテーマって？

（香山）

どういう進め方をするかという。

（渡辺）

進め方、難しいですけど私のイメージとしては、やっぱりこうなんか物とか箱を作るイメージではなくて、さっきお話が挙がっていたように、どうやって、人を巻き込むかっていう形を、重視っていうか、そこを切り口に、参加しやすい市民参加型の部分で、どうやったら人が関心を持ってもらえるかだとか、またそもそも森林について身近に感じていない人たちに対してどう関わりを持ってもらえるのかだとか。

年代にもよるんですけど、森林自体が昔から身近に感じていた世代もあれば、私たちの世代のように、森にもあんまり最近入ったことないだとか、あとは木って遠いイメージの方も

もちろんいらっしゃると思うんで、そういった方々を巻き込むためにどうしたらいいのかなっていう形で。ちょっとまとまってないのですが。

（香山）

はい。三木さんはどうですか。

（三木）

そうですよね、この提言でいうと、提言は前半部分っていうのは松枯れ対策をどうするのかっていう中で、樹種転換を図っていく、もちろん、守る松林っていうのはあるにしても、多くの場合は樹種転換を図っていくっていうふうなことが書いてあるんだけど、樹種転換を図るっていうことはもうこれは、要は粛々とやっていかなきゃいけないっていうことで、そこに関しては、林業のプロが関わってやることだと思うんですよね。そうすると、樹種転換するとおそらく、里山地域は天然更新を図るか植栽するかは別として、広葉樹主体の森林になってくると思うんですけど、その後、そういうふうな森林、次にできる森林をどういうふうにその市民が利用していくのか、あるいは日常的な自分たちのものとして管理していくのかっていうことが、次の時代のテーマになってくるのか、そこを考えなきゃいけないのかと思います。

あと、先ほどのライブ感っていうところで言うと、この会議自体が、松本市民から見て、どっか市役所の中で、上の方で決まってるっていう風な印象を持たれないようにしたいなというふうには思いますね。私たちは言ってみれば、何か、エンジンのスターターみたいなもので、グルグルまわして、あとのエンジン自体が動くっていうのは松本市民がやっていくんだと。やっぱりそういうふうな感じになってないと、なかなか、市民には厳しいじゃないかなというふうには思ってます。何をやっていけばいいのかというのは確かに大きな問題ですよね。

（香山）

そう。それでその何をやっていけばいいか、木のことはわかってるんですがそのスタイルなんですね。まさにある意味では、入れ物としてはこの提言ができているので、改めて何かを作る、箱を作るってね、渡辺さんがおっしゃってたけど、箱を作る仕事は我々の仕事ではなくて、一応箱はできてるんで、もちろんこの箱自体は、よくわかんない。読みとかなきゃいけない。このいっぱい持ってるものではあるんですけど、でもそこを見ながら、あとは、多くの松本の市民の方たちは、やっぱり松本の森林の今の状況から見ると、この松の枯れた後どうなっていくのかってそこの関心が、今としては一番高いところですね。

だからそうなると、この見えるところ、里山のところの松の後がどうなっていくのかそこにどういうふうに市民として関わっていけるのかっていう、その辺のことについて、多分そこがスタート地点としては結構いいのかなという気はします。で、そういう切り口で実はこれは書かれなくて、松枯れとか防災とか、人材とか、そういう切り口になってるので、例えば、市民が里山にどう関わるかって話をしながら、すべての話は、同時に入って動いていけるので、そういうような形で、だから章立てごとではなくてね。市民としては、どこから入ってったらいいのか、そんな読み方をしていって、っていうのは一つのあり方かな。私自身も実は、今日はこの一章の一番について話をしましょうみたいなそういうスタイルではな

いのがいいと思ってたところです。

もう一つライブ感ということで言いますと、例えば、今ここのことはライブ中継されているわけではないんですが、どういう形で、ここでやってることを多くの人たちに繋いでいくのかってそのスタイルについても、今日の段階で少し、話をしといてもいいのかな。これはいろんな準備をしなければならない都合もありますから、どんな形だったらば、会議が市役所の会議室ではなくて、松本市の中でやってるっていう形にできるのかという、その辺のつなげ方の仕掛けっていうのも、今日の内に話をしていった方がいいのかなと言う気がしています。

あと、その上で、次回、何をやろうかというふうになっていけばいいんじゃないかというふうには私が考えているのは、そんなようなストーリー展開というか、今日の残りの時間の過ごし方というのを考えてるところです。

その入口、市民がというところですが、この提言の中では、後ろの方で市民会議を作るっていうところに、一つのまとまり方をしてますが、現状でいうと市民会議誰が来るのって感じで、いざ募集しますとですね、どうやったらいいのかとかそんな状態になっちゃうんで、その市民、広く考えられると思うんですね。

実を言うと例えば林業の専門家も、松本の市民として、暮らしてる人も勿論いるし、あるいは、それこそ、私も小山さん三木さんも松本市民ではないけれど松本のこの会議に関わってるっていう意味で言うと松本周辺市民、これも非常に重要なこととして、だから、ここに呼んでいただいてるんだし。それからもうちょっと言えばですね、この提言を作るときに、これも最後の文章とりまとめに入った時に、委員の皆さんとそれから事務局の方と盛んにお話したんですが、この提言というのは、松本市長に提出する形になっているけれども、これは松本市民、あるいはもう全日本国民に読んでもらいたい。松本市がこういう文章を書いたことは非常に注目されるだろうし、参考になるだろうから、そういうつもりで書きましょうっていう話をしたんですが、その辺が、今年のこの会議、にも多分繋がってると思って、その辺の日々、ここで今話してることがそういう発信として、響いていけばいいんじゃないかなっていう風に、すごく思ってます。

そんなことも含めて、特に一番小農の話とか、そういうところで取っかかりの言葉をいただいたので、三木さんその辺で、スタート地点の話の持って行き方。大学生がいるとちょっと違うと思うんですよね、そこはね。

（三木）

鳥取県にある智頭町という智頭林業で有名なところがありますけれども、智頭町っていうのは、「1/0（ゼロ分の 1）村おこし運動」っていうので、地方自治の点では非常に有名なところで、人口は過疎地域なんですけれども。そこで 100 人委員会っていうのをつくっているんですよね、それは智頭町の施策を決めるのは、役場ではなくて 100 人委員会が決めるっていう、実際は 100 人委員会の中にもかなり役場の方が関わってやってらっしゃる。その中で高校生を何人かいれてみたりだとか。まあ、林業に関わってる人、福祉とかっていう人が入って、その 100 人委員会の中で話し合われるテーマの一つが、あそこは林業の町なので林業の話がある。

松本市はちょっとそれよりもかなり大きい町なので、そういうことはできないと思いますけれども。何ていうかな、着地点としては例えば、松本市の森林のことについて、いろいろ、みんなで方向性を考えていきたい、こういうことやっていきたいっていうふうな、100人なり50人なり何人かをいずれ市民から出していただくことは、必要なのかなと思いますし。

あと今ちょっと面白いなと思ってるのがですね、私が住んでるのは南箕輪村なんですけれども。南箕輪村には大芝高原っていうアカマツの林があるんです。そこもいずれ樹種転換を多分していかなきゃいけないところだと思うんですけど。

今、村人にですね、あそこの大芝高原のアカマツ林で、何をしたいですか、どういう風なことをやってみたいですかという絵をかいてくださいというのとか、ちょっとした文章を書いてくださいみたいな形で村民に募集をかけてます（「あつまれ！大芝の森コンテスト」）。1等だったら3万円みたいな。そういう言葉や絵とかこういうふうな森林にしていきたいとか、森林の中でこういうことを、やってみたいっていうふうなのが、出せると、出てくると面白いなという風には思っているんですよね。その中には、荒唐無稽のものもあれば、研究に値するものとか、実際にすぐできそうなこともあると。

やっぱりそういう意見が色々出てこないと、なかなか、それをちょっと、例えばね、来年からはじめるのはちょっと難しいかもしれないけどすごい面白いじゃないっていうふうなところで、やっぱり話が盛り上がるみたいな状態にしていかないと、最終的なこの松本市の森林を市民が再生していくっていう風になっていかないのかなと。それができるとかなり面白いんじゃないかと思ってます。ちょっとすいませんずれてるかもしれません。

（香山）

いやそんな感じの振り幅で、面白いと思っているんですが、そういう面白い話、こんなことができたらいいなっていうのは、みんながやるんですかそれともちょっと意思、関心の強い人、とんがった人がやるんですか、どういう感じなんですか。

（三木）

全く関心のない人が、やってもなかなか難しいと思います。ただ、一方で、重要なことを決めるときっていうのはランダムに選んで、本当にその森林に関係なくても、何か裁判員制度みたいにですね。ランダムに選んだ委員で、なんかこう話し合った方がいいと言われますけど、森林再生に関してはやっぱりちょっと関心のある方。或いは関心があるんだけれどもなかなかできない、できてないっていうような人たちの方が最初は話しやすいんじゃないかなとは思いますね。そういう人が松本市にどのぐらいいらっしゃるか。

（香山）

それでいったら松本市により近い小山さん、実際、色んな多くの市民活動とも関わっておられているんですけど。

（小山）

松本市内でいくつかそういう市民グループの皆さんと活動させていただいてます。一番多分重要なキーワードは、さっき渡辺さんが言われた全く興味とか関心のない人をどうするか、三木さんそれ難しいんじゃないと言って、確かにそこが一番、多分どこの市町村でも、

森林だとか自然って興味のない方にとったら、宇宙の彼方でみたいな話で、その人達を引っかけるよりは、もうちょっと近い人がいいだろうねって現実的な話もあるんですけれども。

実際にそういったちょっと興味がある方という幾つものグループがあって、いろんな方がいらっしゃるんですけど。香山さんが心配されてるように、意外とそこが浅いというのが正直なところ。それは別に日本全国どこの人口が多いか少ないかっていうのに限らず、やっぱり一定のところまでいってしまうとすぐにそろってしまうって言うのは変わりはない。言うほどそれぞれのグループでは何十人何百人いるんだけど、合わせてみるとみんなあちこちで入ってるもんだから。友達の友達がくっついてたぐらいみたいなことになりかねないので。

その関心のない人たちにどうやって興味を持ってもらうか。もう一つハードルがいるのかな。ただ、その人たちがもしくっついてくれた方が、とんがった意見香山さんが言った、ちょっと尖ったほうがいいのかなっていう。

多分そういう意味でいけば森林って提言の中では災害防止とか林業振興だとか、どちらかと言えば林業サイド自然サイドの一つには考えそうなアイテムで終わってるんだけれども。この中でちょっと出てくる森林セラピーだとか教育だとか、少し一般的な森林からは離れた分野のところっていうのは、もっと引っかかる人がいらっしゃるんじゃないかなと。

そっちの分野をうまく入れていかないと、何だまた林業のことばっかりやってるよっていう、狭い林業に陥ってしまうと、もしかすると市民会議って専門家の人たちが何か市民ぽい形でやってるねっていう、嫌われてしまわないかなって不安はちょっとあります。

（香山）

そんなふうに見える感じはしますか。

（渡辺）

そうですね。私の周りの同世代の人の中では、やっぱり私は自分で木が好き、木が好きとまわりに言ってるんですけど。周りのリアクションはあぁ木が好きなんだぐらいで終わってしまうので、その周りの関心について高い方は多くないのかなあと思いつつ、でも松本って結構芸術とかにも興味、関心がある方がいる町だなと感じていて、今コロナでやっていないんですけど、クラフトフェアだったりとか、街中歩いていても木の家具屋さんとか、あとは食器。木でできているスプーンとかフォークとか、食器が置いてあるかわいいおしゃれなお店があったりだとか、そういった芸術の部分でもすごい幅広い町だなと思うので。先ほどおっしゃった木材っていうのをドーンと推すのもそれはそれであるんですけど、さっき言った教育とかセラピーとかのほかに、この食器が興味ある方だったりとか、家具が好きな人、今だったら木のこととか森のこととかはよくわかんないけどキャンプが好きだみたいな感じのアウトドアが好きな方とかも、私たち世代の方は興味を持ってもらえるのかなってそんなふうに思っています。

（三木）

そういうデータちょっと今、私がやってることがあってですね、森林とか一切興味なくても、単に涼しいところが欲しいっていう人がいるんじゃないかと。それで、夏だし暑いわけですよね。これからテレワークの時代だって言われていて、テレワークでみんな家に帰って

やると、各家で１台ずつ昼間エアコンが動いて多分電気使用量がえらいことになると。

そういう中で、せっかく信州森林が近いんだから、森林の中に何かこう、ちょっとした自分のブースを設けてそこでテレワークができると、電気使用量が減るんじゃないかと、妄想してました。

ちょっと今自分で小屋を作って、大学の演習林の中に勝手に持ち込んで、これから実験申請だしますけど、それでできるかってのちょっとやってみて、そういうふうな手だてをとれば、森林そのものに関心があるんじゃないけど、森林という多面的機能のある空間を使って、新しい例えば仕事をするとか、快適な生活が営めるっていうふうになると、かなりそれに関心を持つ人がいるんじゃないかなというふうに思ってます。

残念ながら、この森林の中でオフィスワークをするっていうのは、すでに軽井沢かどっかで、星野リゾートかどっかやっちゃっててですね、こないだ信濃毎日新聞で見かけて、ちくしょう先を越されたと。

だけど、そういうふうなオフィスワークは一例ですけれども、「森のようちえん」とかですね、そういうのも含めて、木とか森林ではなくて、樹木そのものではなくて、そこの空間を市民が利用していくっていうようなことっていうのは、まだまだ開拓の余地があって、それをそのそういうことができるような森林をこれから作っていこうっていう風なのをやると結構面白いアイディアとかとんがったものとかが出てくるんじゃないかなと思っています。

（香山）

どういうふうに、この話をハンドルしていくのか、勝手なことをとりあえず言い合っていてもいい、まだその時間かなと思ってるんですけど、「市民が関わる」っていう言葉自体が、ちょっと本当は変なんですよね。

市民じゃない人はいないんで、民主主義の社会ですから全部市民でできていて、どっかに貴族がいるわけではなくて、そういう点では、いわゆる業者と呼ばれる、或いは行政であれ、或いは政治家であれ皆市民ですから。松本の空気を吸って松本の水を飲んでるみんな市民なんですね。

それぞれのところに、森林っていうのは必ず影響していて、ただあまり意識してないっていうだけのことなので、街を歩けば木陰に入ると涼しい、本当にこの季節そうですよね。それが森林の一部だというふうには普通の人は思いませんけど、松本の森林の課題ってことでいうと、実は、公園とか街路樹まで、切れ目がないですね。

そういう点で、行政の縦割りの中で別事業になってしまうかもしれないけど、実際には松本には、森林限界のところから始まってずーっとこの街中まで、緑の切れ目がなくて、どこまでが里山で、どこからが奥山で、或いはどこから都市なのかとか、実は切れ目がないんですよね。

それが松本っていうところの凄い特徴だと思っているので、そういう点で、人と森林の触れ合いっていう、今その話を始めたところですけれども、その切り口からでも、具体的なここの政策課題に挙げたところに、いっぱい繋がってくるなって気がします。

例えば、木陰で涼むつもりでいたその木が見上げてみたら、ちょっと風来たら倒れるぞっ

ていう木だっていうことにも気が付くわけじゃないですか。そうなった時に、生活の安全を脅かす木ってのをどういうふうにしたらいいんだってことがリアルな感じになるんですよね。

これを例えば、市役所の方から統計で、街路樹何本は切らなきゃいけないですって数字が出た。ただその数字だけ見ると、えーそんなに街路樹切るんですかみたいな。緑を破壊するんですか、そういう話出ちゃうんですけど、でも実際に自分がその木の下で休憩してみよう思うとその木がどんな木だってこと気がつくと、いや、これはちょっと、違った視点が1個1個出てくるんじゃないか。

そういう点で言うと、ただやっぱり政策課題の方からではなくて一つ一つ目の前に見えているもの、自分が触れ合うものというところを、ピックアップしていく。ていうことはすごく面白い。ただそうは言っても、広い面積の中に、これだけの大勢の人もいますから、全員の感じ方を全部拾えないので、じゃあどこが最初の切り口なのかなっていう、そこは物事を考える順番っていうのがやっぱりあるとは思うんですけど。

どうしよう。小山さん。

（小山）

どのぐらいあれですか。

要するにスパンとして猶予があるのかなっていう問題があって、今その香山さん言われていた、人と森林の関わりみたいな、最終的にその市民とかね、自分たちがどれだけ森林と関われるのかって気はすごい、ずっと渡辺さんがね、最初から主張していた多分関心の一つ、でも絶対どっかで繋がってる。

意識を持ってもらうところには必要なんじゃないか。確かにシンプルにいけば森林再生の提言にある話なんだけれども、そこに持っていくためにある程度幅広な部分を 1 回拾えないのか。

だから、拾って例えばあなたと森林をどうつなげるのかという意識を持ってもらうっていうことだけは、1回きちんとやりながら、その上でこの提言書に向けてどう僕らはアクセルを踏んでいくのか、どっちを向いていくのかというところで、入口を1回絞らない、というアイディアにしておいた方が安全かなと。

確かにその通り僕らは作業量としては、莫大になってしまうのはもう覚悟の上だけれども。縦割りは嫌だよねっていう香山さんの発言もあり、また渡辺さんの方から、いや芸術だとかもっと広い範囲じゃないのと言われてくる。

私自身もそうやって、松本市に関して文化財の方でも関わらせていただいてますから、貴重なものについても見ている。そういう立場いろいろなところに入ってくると、多分どっかでみんな繋がってるはずなんだよね。そこで認識しようよと、って考えたら今後森林って次どうしていったらいいのよ、今こうなっちゃってるよね、だけどこの先どうもっていったらいいのよ、って言う全員の意識を少し動かす、作業を一回やった方が、あと走れないかな、という気はちょっとしたんですけど。いかがでしょうか。

（香山）

はい。その作業はこの会議室の中ではできないので、今日の会議が終わって 2 回目の会

議までの間の宿題みたいな感じになっちゃうと思うんですけど。
（小山）
　でも、2 回目の会議でできないかな。
（香山）
　2 回目の会議をそういう形にする。
（小山）
　ただ、例えばブレストでどんと出してもらっちゃって課題だけをばーって出してだから、僕らがみんなで聞いてくると、良くも悪く、僕らの営業範囲の中からしか出てこないんですよ。それって、本当にそのさっき市民じゃない人がいないのっていう市民じゃない人を救えないんじゃないのかなと。
　ちょっとでも関わると思った人たちに、要するにその時間があればその時間中の Twitter のチャットでも何でもいいからとにかく何でもいいから送ってくれ。
　それで当日はそこでブレストやって、とにかくデータだけ増やしていってそこから、少し僕らが考えて、どういうフォーメーションを組んでたりとか、ちょっとそのぐらいの爆弾発言にはなってて、二回目から三回目僕らが地獄になるなって自分で覚悟はしてるんですけど。
（香山）
　つまり二回目、そういう点で言うと、市民参加的なオープンで、マイクを回す的な場を設定してしまうっていうのがいいかもしれない。
（小山）
　それもありかもしんない。逆にさっき言われたように、提言書あるわけなんでフレーミングはあるよ。ということが前提だとして、でしかも渡辺さんが言われたように、もっと広げていいんじゃないっていう発言があったとすればもう 1 回思い切ってもいい。フレームアウトしてもいい。三木さんがしんどそうな顔をしてるけど、僕はどっちかったら、とんがってしまうのでいけないんですけど。
（香山）
　言葉に詰まってる人もいますが、詰まってないなんか目を輝かしてる渡辺さん、どうですか。
（渡辺）
　広い面でいろんな人と、最初、関わってそのあと絞るという形ですごくいいアイディアだなって思います。また参加型、先ほど Twitter で募集をかけるとかも、仰ってくださったんですけど、さっき冒頭でライブ感があるような会議にしたいだとか、つなぐための形にどうしたらいいかみたいな形の話もあった時に、私一番思いついたのが YouTube で動画配信したりだとか、Facebook で聞こえてくるんですけれども、Zoom で先にリンクをつくっておいて、当日参加者の希望を募ったりだとか、ただそうすると関心がある方しか集まらないかもしれないんですけど。
　もっと広く、拾うためにはどうしたらいいのか私もちょっとあれなんですけども、こう Zoom とか YouTube であれば、詳しくはないけど興味あるみたいな形の方も、参加はしや

すいのかなとは思ったりしますね。
（香山）
　もともと、この今年の全体構想の中で、実は時期としてはもうちょっと後のイメージもあったんですが、去年の専門家会議でも、四賀地区で市民参加のフォーラム的なものをやって、現地視察とかも入れて、そういうイベントをやったんですね。
　今年のこの会議でも、何らかの形で、この 4 人だけではない。かといってまたプラスそのゲストの誰かっていうんではなくて、市民と交えて意見交換ができる場を設定したいねという、そういう話はしてました。
　ただ私の発想というか、行政の人と話してる発想だとどうしても、去年やったような、カチッとした会場でフォーラムとか、或いはちょっと午前の部、森林視察とかってちょっとそんな感じにとどまりそうだったんですが、今出てきたような話はもうちょっとダイナミックに、しかも、かなり初期の段階で、もう一回オープンにしてしまうというアイディアが出てきて、ちょっと私も面白いなと、ちょっと座長としてはドキドキしながらではあるんですが。
　実をいうとすでにですね、昨日一昨日あたりですかね、この会議がありますよっていうことが、私はちょっと最初の発信を控えてたら、松本市民の方から、Facebook に流れてきまして、それライブ中継やらないんですかっていう、もういきなりそういう意見が出るんですね、もうそういう時代ですよね。確かに今日も傍聴の方来ていただいてますけれども、平日のこの時間って非常に微妙で、なかなかここまで来れる方はあまりいない。
　でもこれがもしもライブ中継されてれば、かなりの方が見るんですよね。どのみち今、この人数だけの前で、もうすでに公開ですから、世界に公開されていたって、もう今更影響がないっていうことではあって、そういう点で言うと、そのやり方も結構、私ちょっと緊張しますが、でもありかなという気はしないでもないです。
　ただ、ちょっと三木さんはちょっと遠い目をしていますが。
（三木）
　いや、面白いんなと思うんですけど、何て言うんでしょう。
座長代理ってここに書いてあるので、香山さんが、例えば当日風邪をひいてこない時にですね、私はそれを会議を回すのかってのはちょっと今、どういうふうにしたらいいんだろうっていうのはあるんです。
　ただ、私も研究やってる身なんで、やっぱり松本の市民が、或いは松本市に関わる市民がですね。どういうふうな森林に関してお考えを、イメージとか、持たれてるのかっていうのは、やっぱり自分の耳で聞いてみたい。
　なんかほら、世論調査みたいなのをアンケートかけて、何々でこう思っている人が何%いますっていう数字はやれば得られますけど、そうじゃなくてその、数はそんなに何千件と必要ではないんですけど、松本市の中で実際に今私たちこんなことをやろうとしてるんですけど、どういうふうに思いますか、或いはその森林、これだけ松枯れ見たら枯れてますけども、どういうふうにしていきたいんですかとか、そういうふうなことを、私やっぱり聞いてみたいと思うんですよね。

それで今ちょっと遠い目をしたのは、どうやったら聞けるんだろうっていうのがあって、なんか、桃太郎旗みたいなのを背中に挿してですね、松本市とか或いは周りの、四賀の地域とか、ああいうところの道を歩いてその辺に歩いてる人捕まえて話を聞けばいいのかなとか、そういうことを考えてました。それができると面白いんじゃないですかね。

何かこう会場に来てくださいっていう感じよりは、そこ歩いてる人捕まえて私たち今こんなことやろうと思ってるんですけど、何かいいアイディアないですかとか面白い話ないですかっていうふうに、聞いていきたいなと今思ってました。

まぁ暑い季節は嫌ですけど。

（香山）

どのタイミングかわかんないですけどね。要するにこの委員が出張していくわけですね。ここに来てくださいじゃなくて。

これがもう大分前から言われていることですけれども、松本市も実は市民と関わるいろんな企画というのを盛んにやってはいるんですね。

ただ、多くの場合、行政の方のお仕事ということでやられている性質もあるんですが、平日の昼間に公民館みたいなことになる。そこにどういう人たちが出てくるかというと、地域の比較的高齢の、しかも圧倒的に男性ばっかりだという話もありまして、そこで現に松枯れの問題、今年課題として動いている樹幹注入の事とかについて、各地で説明会も行われているようですが、参加するのはどうしてもそんなような方になり、市の方から、こんなことやりますって言ったらそれでいいじゃねえかいっていうような、なんとなくそんな流れでいってしまう。

それは確かにそれも一つの市民の意識の部分ではあるんですが、そこが非常に狭い。というか、拾えてない部分があるんだろうな。おそらく、現役の仕事をしている人たちは平日の昼間なんか出てこられるわけないですし。かといってこの平日のこの夕方、これも難しいですよね。大抵ね、それぞれの仕事があって、残業があんまり今ないかもしれないですけど、家に帰って、ビール一杯飲んでるタイミングです。そうでなければ、家事で忙しいとか、子ども迎え行かなきゃいけない、そんな時間帯なので、ここに来てください、それもなかなかできないかもしれない。

そういう点で言うと、いろんなやり方。この会議ってものが、会議室どう飛び出して繋がっていけるかっていうその辺の工夫は、今の時代にならありえます。ただ、技術的にどこまでできるか。その辺の問題もあるんですが、例えば、YouTube ライブできますね？

（事務局）

実際に多事討論会などでも使っておりますので、場所によりますけど、可能です。

（香山）

というわけで YouTube ライブは可能。もう現状で特別なことやらなくても。三木先生がゴープロを頭につけて走り回って、その中継ができるかどうかはわからないんですけど。

（三木）

いや、中継はちょっと電波がどうかってありますけど、その辺で私が托鉢のように回って、ちょっと話聞くっていうのは、これはやる価値があるなというふうに何となく思ってきま

した。
（小山）
私ここに行ったら面白いなと思って、イオンモールあたりでずっと座り込んでたら面白いなと思います。多分、それなりの街ん中で、所さんの番組みたいに歩き回ったとしても、出会う方は限られると、逆に皆さんが来るところ、最初パルコ前でと思ったんですけど多分観光客が多いなと思って。イオンか南松本のイトーヨーカドーあたりに座り込んでたらなんかできないかとかですね、私だったらそっち考えるかなっていうなんかそんな馬鹿な事思ってしまったんですけど。
（香山）
体張った意見が、どんどん出てきてますけど。どうですか、渡辺さん？いや自分がやるかじゃなくて、小山さんや三木さんが座り込んでるの見たら、市民としてはどんな感じがします？
（渡辺）
私も学生時代に街中で話しかけたりしたことがあるので大変だなと思いつつ、知り合いの知り合いだと繋がりがあってしまう。そうでなくて本当に全く知らない人にアタックという意味では面白い出会いがあるんじゃないかと思う。
（香山）
それを取材してもらえば十分ネタにはなりますね。それが実際そこで拾った意見を、数は少ないにしてもね。そんな形で、いろんな情報、意見を持ってきましたよっていうのも、ここに持ち寄っていうのでも、それはライブとは違いますけど。
そうやってなんで私たちは自分たちのハードルを上げるんだろうと思うんですけど。つまり、この１回目の会議と２回目の会議の間にそういう取材をしなきゃいけないんですよ。
（小山）
でもあれですよ、せっかくなんていうんですか、せっかく何かアクション起こして、じゃあどういうアクションを起こせるのかという気になっていて、ではそれちょっとハードル上げるのは、それは一番、楽なのはツイッターか何かチャンネル上げといて勝手に書いてねっていうオンライン型のものも当然ありで、それがどこまで届くか、どんな手段を使っても多分届くところっていうのは全部書けない。全員ひっかけるのは、それ絶対無理です。
じゃ、どういう方向か。そういうふうに、自分たちの出張があるだろうし、オンラインで待ってるタイプ、多分一つのタイプでやってしまうと面白くないっていうことだけはちょっと思った。
（香山）
具体的にどういう形になるかってことは、まあやっちゃえばいいんだと気がするんですけれども、いずれにしても、今ここで出てきてる話、この会議の進め方の一つのアイディアとして、まずここで 4 人で話を詰めていく前に、もうすでにたたき台としての提言はあるし、だから、一度、市民の中に出て、あるいは市民から意見を直接ここに届けるという、そういうスタイルを作ってみる。
それが、この会議のそのものではなくて、僕のタイプでの取材であるとか、オンラインで

の動向を集めるであるとか、そういうスタイルもあるし、或いはその次の会議を、ネットで中継しながら、そこにリアルタイムにいろんな人たちも参加できるようにしてしまう。

今日、傍聴の方は発言権がないんですが、もう発言してもいいんだよっていうふうにしてしまえば、そこでできるというんですよね。実際は決まりとしては私がいいと言えばいいんですか。そんな感じなんですけどどうですか。

ちょっとそこは後で事務局と相談するって話ですけれども、いずれにしても、そういうような市民オープン、市民の声を多く取り入れていくっていうのを、まずかなり早い段階でやってみて、それと提言との落差というか、そういうものを具体的にこの中で協議していくっていうのはいいかもしれませんね。

（三木）

なんか、それはそれでいいかも。例えば人に聞いたときに、いや森林のこととか林業のこととか興味ないよっていう人も、多分何割かいらっしゃる。木とか興味ないよとかね。そこでなんか単純なアンケートだと、興味ない人が何十％いますとかっていうふうな感じになるんですけど。

私はそれで、それは何でっていうのをこちらから聞いてみたいっていうのがあって、それは何か、例えば、なんで関心ないんですかっていうふうなこと言ったら、いや他にもっと大事なことあるでしょうとかというふうな回答かもしれないし、或いは私は例えば山が緑色だったらいいんだと。そこに何が生えていても構わないけど、茶色は困るけど緑色だったらいいよみたいな。そんなレベルなんかもしれないし。

そういうふうな関心のないと言われてるような人達を飛び越さないっていうことを考えるってなると、やっぱりそこの差なんでっていう。

こうだったらどうみたいな感じでこっちも、聞くだけじゃなくて、こっちも話をする。そんなことをやっていかないと、最終的にそのいわゆる合意形成にはならないんじゃないかと思ってるんですよ。なんかそういうことができたら、すごい全国で他にない、これまでやったことないっていうふうなものになるなあと話を聞いてました。

結局、その提言っていうのを、うまく作ったとしてもですね。割といろんなところで作られているような、提言とか、計画っていうふうなものが、松本っぽいものができるだけになっちゃう。そう考えると、これまで他のところでやってこなかったような手法というのを、やっていかないと、何か一つ突き抜けたというか、新しいものって出来てこないのかもしれない。なんとなく思考があさっての方に飛んでいきます。

（香山）

そうですねライブ感っていうことが、私が狙ってるそのライブ感がすでにもうここで発揮されているなというふうに思ってます。多分、この書いたものを実行するっていうこと自体は、もう優秀な松本市のスタッフの方がいればできるんですよね。

ただ、それは実行されたとしてもそこで実行されてるだけで実際に森林に反映されてくるかっていうと、これはちょっと違った話になる。

或いは森林所有者の意識ってところまで、これも書いてるんですけど、森林所有者とか課

題っていうのも、なかなか、また行政がやった政策だなっていうところになってしまうし、それともう一つは行政内、政策ってことになるとどうしても予算がどう、という話になるんですけど、今話してることって、全然予算関係ないんですよ。

人々の意識っていうところで、実はそれが大きく集まったところに、結局、人々っていうのは税金を払ってるわけですから、最終的にはそれがまた政策、具体的な予算に組まれる。それがないと、結局今までの流れの中でやってるところにちょっと色を付けるっていうのにしかならないじゃないかという気はしてます。

そういう点では、去年のこの専門家というのは、余りにも森林や林業に詳しい人だったので、その枠は超えてないです。森林林業的に間違ったことを書いちゃいけないっていう、ちょっとその意識もあったし、或いはいわゆる市民参加と言いつつも、市民の中でいわゆるステークホルダーと呼ばれる人たちは入れないわけにいかないな。そこから構成してくと、ちょっとそんなのはあるんですね。

ただ、そうは言っても森林とか林業って、結構専門性の高い分野で、現に山で木を切っているっていうのは非常に限られたプロの人たちで、或いは調査研究をやってるっていうのも非常に限られた人達だし、専門性って言い方していいのかどうかわかんないんですけど市民による里山活動というのも、ある意味では非常に限られた人たちかもしれません。ただその限られた人たちがやってるがゆえに、それなりの形ができてくるということはあるんです。

それで、今ちょっとどんな形がいいか、動かし方は第 1 回から第 2 回に向けての動かし方については、ちょっと具体的な作業、段取りとかいろいろあるので、私、ちょっと事務局の皆さんも相談しながら、YouTube がいいのか Twitter なのか、ちょっとその辺のことは、また検討するところでもあるんですが。

ちょっと先々の中で、そうは言っても、専門家という人達をここに交えていうのは必要だなと思っていて、その中で前回はどっちかというとその研究サイド、そっちの専門家だったんで、実践サイドで専門にやってる人に積極的に参加してもらって、これはだから、例えばここの場は言ってみれば一つの舞台だとしたら、そういう人たちは一生懸命舞台に上がってもらうと。

そういうことは必要だと思っていまして、そこでどうしても欠かせない、何人かの人たちがいるんだろうなという気はしてます。それが誰なのか、或いはどういう順番がいいのかってことはあるんですが。これはどうしても必要なんだろうという気はする。

例えば、森林林業にとって大きな重要なプレーヤー、一つは森林組合というものがありますから、森林組合抜きに語るってことは結局、実践的にはそこでつまずくことになるので。森林組合って誰なのって、その問題がすごくあるんですけど。協同組合なんでね、本来森林所有者の集まりですけど。

でもその顔になって実際動いてる方、松本広域森林組合にはぜひ、ここの舞台に 1 回上がっていただいて、いきなりこんな議論に巻き込まれると態勢が準備が整わないかもしれないので、事前に実はこんな雰囲気ですっていうことを十分に説明した上で加わっていただく、そんな機会が必要なんだろうなって気はしています。

それから、市民サイドっていうことで言うと現に市民として森林活動している方達もいらっしゃるので、その人たちとどこのタイミングでどういう形で接点を持っていくのかっていうのも、今期の中に、やっぱりやっといた方がいい。個人的には何人も知っている方がいて長いおつき合いもあるので、そういう人たちと同じ舞台上に上がっていただいて、それもやるべきだと思う。

それともう一つ、木材。今、ウッドショックという騒ぎになっていて、そのウッドショックというのは、どこで一番騒いでいるかっていうと一番末端の建築関係。そこが一番大変なことになっていて、林業の私としてはぼんやりしていてですね、ほとんど影響がないんですよ。そのギャップってのはまさに日本の木材利用、森林がね、うまく回っていかないことを本当に象徴しているような気がしていて、本当に林業の人たちがウッドショック、全然ショックに感じてないんですよ。申し訳ないけど。食べていけるんだもの。ところが家を建てている人たちは本当に死活問題なんですよ。なんでこんなことが起こっているのか。これはタイムリーな話なので、そこに関わる人たちとの具体的な接点を作っていきたい。

そうやって考えていくと幾つか、この 4 人プラス 1 っていう方で関わりたいって人が出てきて、もう全然今年 1 年じゃ終わらなくなるんですけれども、今年 1 年の中で、どの辺からね、やっていくのかなという、それはちょっと感じてるんです。

どうでしょう。どこがいいですかね最初の声かけ、今ウッドショックだから、利用側ですか？

（小山）

山から行くか、下から行くか。思うんですけど、山側から行くのか、利用側から行くのか、ちょっと話聞いてて、ハッと思わされたキーワードがクラフトフェアの関係の方ってどうしてもファーストアイテムに入れたい。香山さんやこの 3 人は林業側なので、山側、要するに木を切ってる方、それをサポートするボランティアの方、さらには使う側の方って意識があるのだけども。

一方でやっぱり森林再生に関して全市民の問題だよねと言ったときに、僕らが多分一番弱いのが、今まで使っていなかったけどちょっとは関わってる人達。例えば家をリノベーションしたら木材を使ってくれるような人達というような、ちょっと遠いんだけど、木が嫌いじゃない人って、さっき渡辺さんが言われた、いみじくもそういうところがあって、そういう方にお声掛けをして聞いてもらうと。いや、この提言書が、何て言うんですかね。さっき僕がその一般市民に聞いたらって言ったのも一緒なんですけど。「自分ごと」になって欲しいな。これで例えば次に森林組合の人が来ました建築が来ました。

ああ、またっていう、何て言うかさみしさがあるのかな。一方で今回、森林環境課、林業の部局ではなくて総合戦略の方も入っておられるっていうのも気にしていくと、そういう戦術をみた方がいい。

そうすると僕らのこのメンバーこうやって見ていけば、信州大学、林業総合センター、林業やってる人っていう、ソマミチもっていうメンバーになってしまうと、なんかちょっと林業系だよね。山側の人間が 4 人集まってきて、何か雑談会してますよっていう雰囲気に見られちゃうと、ちょっと早い内に 1 回ぶっ壊したいなっていう思いがあって、さっき市民に

聞いたらとか言ってたわけで、むしろお呼びするにしても最初は、僕らはそんな狭い了見で考えていませんよっていうアプローチをしてみることで、「自分ごと」にできないかなってのはちょっと思いました。

それこそ例えばギター作っているフジゲンさんとか、とにかく僕らから考えると考えられる限り遠い人を、だけど、この森林再生に関わり関わるようになった、指一本とか、足の先のちょっとだけ触れてますよって人を最初に呼ぶことで、もうちょっと市民目線になれるのかな。

（香山）

そうですね。やっぱり、ある意味わかった話をするだけになっちゃうんで、いかに遠い人が関わっていくかで、この４人がやっていくこと自体は変わらないんだから。

その本当に特定多数の市民が来て、意見をどんどん言ってもらうっていうのもアリだけど、それなりの専門家でも結構遠い人っていう出会い方もしたいですね。そうすると市民から見たときに森林とか林業とか木材とかっていう、その距離がぐっと近くなるかもしれないですね。

そういう点で言うと、世代的な問題もあってちょっとここ平均年齢高いですからね。ちょっと船がこう傾く感じなんですけど。若い側の代表という感じでもある渡辺さんどうですか。

（渡辺）

小山さんからお話しあったように、私は興味あるけど周りの人たちも興味持ってもらいたいなと思う気持ちもあって、「自分ごと」としてとらえてもらうためにはどうしたらよいかと思ったときに、興味はない事はないけどちょっとは関わっている人を、巻き込んでいきたいなって思っていて、さっきクラフトフェアのこともあったですけど、松本市内って個人事業主でお店を開いている方の横のつながりが結構ある街だなと感じていて、あとはゲストハウスも結構松本市内多いので、ゲストハウスの方々ともちょっとアタックしてちょっと関わっていけたら、面白いんじゃないか。

ゲストハウスを運営している方々も結構、やっぱりアクティブな方々がいたりだとか、顔が広かったり、若い人たちや幅広い世代の人の繋がりもある人たちとも繋がれるのかなあと思ったりとか。また、さっきリノベーションなんていう言葉もあったんですけども、松本市内ってイチから新しい建物を作るっていうより、あるものの建物をリノベーションしてこう残しつつ新しいものを融合させる文化としてすごい浸透している、大好きな町なんですけれども、なんかそういう人たちとも、関りを持てたら面白いんじゃないかなって思ったりします。松本のアカマツとか、床材に貼っているお店とかもあったりとかするんで。

（香山）

そうですね松本の本当にね、生活してる人に近いところから見たら本当にそういう意見が納得しますね。もし大町だったら私もそういうふうに思ったんだろうな、今ふと思ったんですけど。やっぱり松本の人にとって、この松が枯れてるっていう状況だけはもう誰が見てもわかっていることで、もう目つぶらない限り、見ればああまたになっちゃう。そういうとこで暮らしてるわけじゃないですか。

それって、全然たとえ的に変ですけど、コロナウイルスが蔓延してしまってることはもうどうしようもないっていう中でマスクしながら暮らしてることと、ちょっと似てるところがあって、避けられない。

でも、コロナの出口はちょっとわかんないですけど、松本の森林の出口に関しては、去年の調査でもはっきりとデータが出ていて、森林は大丈夫だと。松は枯れちゃったけどそういうことはあるんだから、それをお互いに確認し合あえるとかね。

そういうことをやっていくと、これから先の松本市の森林再生っていうことが、多くの市民の課題になっていけるんだろうな、という気がします。

あと１時間というところではあるんですが、ちょっとブレイクしますか。
ちょっと１回頭を冷やして、７時３０分の再開で。小休憩します。

（香山）はい。それでは再開します。あと１時間の中で収めていくんですが、やはり、この全体の中で、第 2 回の設定というのは結構重要なことかなという気がしてきたので、この次回いつやるかということも含めてですけれども次回、この今のいろんな議論を通じて次回の中で、どんなスタイルでどんなところに、話を持ってくのがいいかなっていうところをそこを主に集中したいんですが、まず年間のスケジュールでいって全部で何回でしたっけ
（事務局）５回
（香山）

５回ですね。これも明確に決まってるわけではないんですが私の考えとしては、提言っていうのがあるので改めて提言についての提言を出す必要はないんですが、そうは言っても、皆さんの注目を集めながら、こういうトークをやってる、トークで終わらせるべきではなくて、後から何年も経ってからでもあの人たちは何をやったんだろうってことがわかるような記録でそれを、もちろん毎回の会議についての要約というのは作っていただいて、それがホームページで公開されますが、最終的には、この我々の 4 人がどんなことをやったのかということをまとめた、後から見て、あの人達はこんなことやったんだなってことを参考、参照できるようなものは、そういうレポートは作るべきだと思うんですね。

そのレポートを作る作業というのが最終回終わった後にやって、それが、前回の提言は本当にぎりぎり 3 月入ってから出ましたけれども、むしろ、本当に 3 月すぐに出るぐらいっていうタイム、あんまり遅くなくレポートは出して収束する。そのぐらいなスケジュールとしての、ですね。それで内容的には、何かしらのレポート、それはどんな形にするか書き方にするとか、文章なのか映像なのかさえもまだわかりませんが、それをしていくべきだと思っています。ということで、幾らかぶっ飛んだ話をしつつもですね、そういうものを作るんだということは、改めて確認していきたいなというふうに思うところです。

そのスケジュール感の中で、第１回、こういう、まだ何となく雑駁な話をあえてしているわけですが、2 回目からは、きちっとテーマを決めつつ、このことを言いますよっていうのをしたい。それと最初にもチラッと言ったんですが、2 回目に向けて、我々４人がそれぞれ持ち帰りの課題を持っていくと。

例えば町へ出て市民へ取材するっていうのかもしれないんですが、とにかく持ち帰りの課題を持っていって、次回、第 2 回までの間にそれなりに自分なりのそういうものの成果をもって、第 2 回の会議には臨むと、そういう形で、いけばいいなというふうに思っております。

まずそのスタイルを意識した上で、じゃあ次どこからやるかって言うことを改めて話をしたいんですが。小山さん何か。

（小山）

多分その今、最初で最後のゴールから来たと思います。

実際どっかでそういうふうに、いろんな人の声を聞きたいよね、っていうのがありつつも、じゃあ、最後はゴールって、どんなその先提言の提言じゃ無駄じゃん。そりゃそうで。

このゴールの後、僕達が出したゴールってどこに繋がるだろうとっていうところの議論をしていってバックスキャンの方がいいかなと。フォアスキャンでいっちゃうと、このメンバー際限なくなるんで、バックスキャンで考えてった時に、ここの、要するに 3 月の頭に出すレポートがどうなるかは別として、僕たちが出すレポートってどういうところを見てればいいんだろうっていうまずはその方向性。その方向性に向かうには、要する後ですね、4、5 回目だとすると、２、３、４、５であと起承転結、4 回しかないので、その 4 回をどう振り分けていけばいいってことになる。

それ一番最初に考えなきゃいけないのは 5 回目に、この後に出してくるレポートってどんな雰囲気のものを最初に考えるべきかっていうことかなと思って、ちょっとそこを整理したいなと思います。

（香山）

そうですね。提言の提言じゃないので、何だろう。

実行会議なので、会議自体がその実行の一部になってるんですが、でも 1 年間やったことが、今度その次の年にどう影響するのかっていう。その次の年に影響するような、もちろん今日の会議自体が、その一部ではあるんですがゴールとして今年度の到達点として、来年度に直接反映される要素を持ってなきゃいけないんだろうな。ですよね。

どうですかね三木さん。今この瞬間の段階での思いは？

（三木）

来年度に反映するっていうことを考えると、ひとつは実行会議の後に例えば市民会議ができるとすると、市民会議ってのはこういうふうにやるのだというふうな例えば形式だとか、メンバーとか、そういうふうなものがある程度この中でアイディアを出して、こんな感じでやったら一番いいんじゃないですかねっていうものが出てくるっていうのがひとつは必要だと。

それから、提言の実行っていう意味で言うと、提言の中にいくつか書いてある、事項の中で市民が関与できる項目に関しては、例えば来年度、こんな感じのことをやってはどうだと。スタートアップとしてこんなこと初めたらだろうっていうふうな、内容が書けるとよいのかなと思います。あとどうしても提言の実行っていうふうにやると、これは市役所のやってることの中に、こういうふうに、次に施策をすればいいっていう話になっちゃうんですけど。

だけど、私が研究室の部屋で森林政策学って言う名前の研究室やってるんですけど、ここで学生に言うのは、この森林政策っていう政策っていうのは行政がやるっていう意味じゃないんだと。市民がいろいろ日常生活の中で、他人と一緒にやることがあるだろう。それが全部政策であって、その一部が行政がまあやってるだけの話なんだと。そう考えるとそのこの実行っていうのは、市民に対して来年度こんなことをやってみようじゃないか。

仮に松本市、市役所がですよ、全然応援してくれなくても市民でこれはやろうじゃないかっていうふうなものをやっぱりやっていかないと、結局例えば市役所、全部市役所頼みになったらこれまで通りだし、例えば市役所がねコロナ対策とかの予算が厳しいのでっていうふうになったら、来年度は、じゃあ、この森林のことはやりませんっていうふうに市民が思っちゃうといけなくて、市役所の態度如何に関わらずやっぱり松本市民でこれをやろうよっていうふうなものまで出来ると、出来なきゃいけないのかな。

そうじゃないとそのそれが何年か後ですっていうふうになると、結局いつまでたっても森林再生ってやっていけないので、やっぱり年度末にはそういうふうなことが呼びかけられるような内容っていうのが必要なんじゃないですかね。そう思います。

（渡辺）

私のイメージなんですけど、ひとつは絶対こうなんか内輪で何か遠い人が決めたものだなっていうふうにしたくなくて、やっぱさっき今のお話にもあったように市民の人がこう興味関心持ってもらえることだったりとか、自分ごととしてこう木や森のことを考えてもらいたいっていうのがベースにあると思うので、上の人が何が決めたっていう形を残すのではなくって市民の人々が、興味関心持ってるようなことだったりだとか、あとは単純に木っていいなって思える人が１人でも多く増えるような形にしていけたらなあって思います。

（香山）

３階にいるだけで全然上にいるわけではなくて上の人ではないと私は思ってるんですが、そういう点で言うと、市役所は上にいるんではなくて、市民を下支えするということになると思いますが。

うっかりすると、確かに政策って上から降りてくるっていうふうにみんな思っちゃうんですよね。そうじゃなくて政策ってのはまさに市民の生活なんだという、そういうことだと思うし、それを我々今回のテーマは森林再生、森林政策っていうところがテーマだから、それは何か決まったことがおりてくるとか、予算があるから何やるかとかそんなことではなくて、それをもう一部としてはあるとしても、普通の人がじゃ自分はこれやってみようかなっていうアイディアが、そこに盛られているレポートにしたいですよね。

大分、私自身のイメージもクリアになってきました。これをやりたかった。まさにこういうイメージクリア化してくっていうことを、自分で 1 人で考えてシナリオ作って、座長だからやれば出来るんですけど、それはしないで、今ここでそういうのが発生するのがいいなと思ってたんですけど今そんな感じがすごくしてきています。

そうなった時に、例えば具体的な形としてこの人が集まったものとしては、ここに書かれてる市民会議というのが来年には出来ていて、それはおそらく、いわゆる集まって会議室で会議するような会議ではなくて、名前は会議とついてるけれども、普通考えてるようなもの

と全然違う。すごくアクティブで、予算があろうがなかろうが、自分の生活の中にあるっていう、そんな動きが起こってくるそのようなものとして、市民会議というのがデザインされていくんじゃないかなという、ちょっとそういうイメージが湧いてきました。

それに向けて、提言書というのも非常に立派な枠組みだったんですけども、今度はアクションのためのいろんなアイディア集とかね、ヒント集とか、あるいは、どうでしょう。情報の入口集とか。大学の先生は文献リストを作りますけども。

（三木）

市民が出来るぞって、そう思うっていうのはやはり、例えば他のところでも、こんな感じでやってます、やりつつありますみたいなのが、情報として入ることがやっぱり必要なんじゃないかなと思います。

やはり森林再生って結構大きなテーマだし、見渡せばその辺の松は、低い所の松は枯れてしまっていて、こんなの、どう市民が関与するんだって言うふうになっちゃうんで。

そこをこんなんだったら、ちょっとやればできるじゃない。何かそういうその市民自身が、これで自分が出来るぞっていうふうに、思ってくれないといけない。それは、人材育成というところでやるのかもしれない。何かそういうヒント集みたいなのは、ちょっとついてると、すごくいいんじゃないですかね。読んで、楽しいものワクワクするものが出来るんじゃないでしょうかね。

（香山）

そうですね形としてはやっぱりある程度ドキュメントという形になると思いますから、どう考えてもこのメンバーでもって映画を作るとか、演劇をやるとかっていうそこにはなかなか、この 1 年で間に合わないと思うので、そういう点でその一つの文章ドキュメントの中にそういう情報が盛り込まれているっていうのはやりたいですね。

それが松本の今の状況の中での市民の行動に役に立つものとして作られていくっていうのがとてもいいなあと気がします。

そうなると、どういう作業をしていけばいいのかっていうことのイメージは、何となく逆算してはいるんですが、その中で、そうは言っても、ここに松本市民 4 人の中でも 1 人しかいないし、もっといろんな市民の声。去年の(提言)は専門家の、ある意味では考え方を示して、ある意味ちょっと上から目線ですよね。要するにもう、この松はもう救えないって言っちゃったんですからね。えっそうなのっていうか、ちょっと多くの市民の方が戸惑ってるわけですよ。何とかなるんじゃないんですかって。

であるいは樹幹注入の話が今出てますけど、樹幹注入で 7 年間持ちます。じゃ 7 年間たてば何か別のいい方法が見つかるでしょう。そんな意見もあるみたいですよね。

専門家は、いやそれは無理です、おかしいって言うんですけれども、そうではなくて、いや 7 年間松が枯れるか枯れないか見てるんじゃなくて、7 年間の間にやることものすごくいっぱいあるじゃないですか。

そういうアイディアがあれば、松が枯れるか枯れないかっていうそういう問題から、次のステージに乗り越えていけると思うんですよね。今市民の関心はまだちょっとそこにいってなくて。えー、松が枯れるっていう、まずそこで。何か専門家はもう駄目だと言ってる、

と言うねそこのところで。でも、ほとんどの人はそんなに松のこと、実は関心ないんだけど、でも、松林のすぐ隣に住んでる人にとって、どうしようもないってどうすりゃいいんだ。ちょっとその迷いの中、すごいがっかり感の中にいるとは思いますし、そこをどうやって乗り越えていくかっていうアイデアは、今年のこのグループの中から出していかなきゃいけないなというふうに思いますので。

例えば私も、もしも四賀に住んでいたら、松すごい大事だと思ってたのに、もう駄目だって言われたらやっぱり今むちゃくちゃがっかりしてる。

でも専門家は駄目だっていうどうしようもないのかってそこから先、まだちょっといけないんで、ちょっと先に行くために、専門家がいや大丈夫ちゃんと広葉樹林を再生しますよってこの間言いましたけど、それもちょっとピンとこない。だって、その再生する広葉樹林使って、自分の生きてる間に使えないじゃないかみたいになっちゃうし。

でもそうじゃない、なんか楽しいことが、いろいろできることがあるよっていう。その発信がすごく必要だなっていう気がしていて。

だから、そういう点で言うとそのクラフトであるとか、もっと生活に密着したところの部分というのも当然入ってくるだろうし、もろもろのいろんな活動、それは市民活動からプロフェッショナルなものから、研究科からいろんなあると思いますけどそれがすごい、いろんなアイディア集的なものってのもそのドキュメントであったらいいなというふうには思いました。

そうなると、そこから逆算していって、次回、ゴールが見えると、あとは全部逆算じゃなくて次回これからやっていけばみたいな感じになると思うんですけど、次回のイメージとしてどんな感じになってきますかね。プログラムを作るのが得意な小山さん。

（小山）

完全にそっちのセクションに落とし込まれてますけど、多分あれですよね。

今、すごい大きなキーワードとしては提言よりはもうちょっと、みんながこれをやってみようと思えるメッセージか、どっちかって言うと呼びかけるメッセージを出す。

キャッチコピー作ってください。

それに、いろんなそのキャッチコピーに繋がっていくアイデア集みたいのが並んでくるっていうイメージになる。

であればやはり、しかも自分ごとにしたいよねという渡辺さんのキーワードがすごい僕はささっていて、最初はどうやって自分たちが自分ごとにできるのかな。その 20 万の人たちが自分ごとにするにはどうしてったらいいんだろうかを 1 回きちんと。

そこから上がっていけば次はそうは言っても、森林側としてどう考えていくのかという論点が来て。20 万市民をターゲットにしたものをやった上で、こんど森林側の視点をやっていって 2 回目 3 回目をやっていけば、4 回目 5 回目ってそこでの課題の交通整理っていうスタンスを落としていけないかな。

とにかく、あと 4 回で何とかしなきゃいけない。そんなスケジュール感でいかざるを得ない。1 回 1 回めちゃくちゃ濃いんだと。三木さん辛そうな顔してるけど。

（香山）

大丈夫。私風邪ひいたりしないですし。体調を整えてすべての回を乗り切りたいと思います。

（三木）

5回って正直なんか最初5回って多いな、5回もやるのかみたいな感じで思ってましたけど、そう考えるとあと4回でやらなきゃいけないって感じですね。

1回1回ちゃんと、ちゃんと前に進まないと、おしりの所に間に合わないなと思う。

（香山）

とにかく早くにいろんな人の意見を集めるところからやりますか。

それに、2回目の会議っていう形だけでもちょっと収束しないかもしれないけれども、2回目の会議もその一つのパーツとしてはね。

そこの中に、まずは松本20万市民の全部の声ではないけれども、今そのタイミングで声が届いた人の声しか聞けないけれども、でもそれを我々が受けとめる場を作る。受けとめる側の受けとめ力はとてもあると思うので、ただそれを交通整理したりとか、それはそれで大変なことなんですけれども。

でもそうやって、まずは今この状況の中で、松本市民が思っている森林再生、課題、それぞれのいろんな事情の中でも言いたいことってのを 1 回受けとめてみようという、それが第2回というあの場の一つの形。ただそれが、ちょっと技術的にどんな形にすればいいか、もうちょっとそれを、検討したいと思ってますけど、何らかのそうやって受けとめる。まずは、受け止めてみる。それを今度は森林側、林業側、あるいは木材側でもいろんな課題が出てくると思う。

それに対して、逆に答えていくために、それぞれの専門家、もちろんこの中に、これも専門家ではあるけれどももうちょっと特定の専門家の人も交えた形で、それが課題、ワーッと寄せられた課題にこう答える。いや、全部答えは出ないんですけど、答え得るチャンネルを作る。

答えそのものって本当にすごいこれは森林再生ですね、大変な話で。要は再生するのは森林なんで、こちらが何を考えたって森林がどうなるかっていうことはまた別な話っていう。その問題も抱えてるんだけど、でも森林に対して私たちはこういうアクションをとってきますよっていうその、いくつかのチャンネルが示される、でそのアイデアに示されるっていう形になった。

すいませんが事務局の方はちょっと今のところついてこれてないような気も若干しますので、後で私フォローします。

そういう意味で言うと、非常に今まで、この手の会議がやってきたスタイルとものすごく違うんで、従って第 2 回の会議が、例えば YouTube ライブのような形を取ったとしても、YouTube ライブの、この会議自体は2時間会議ですけど2時間の会議の中で、ちょっと収まらない要素があって、そういうような声の集め方をどうするのかとか、ちょっとその辺も検討が必要ですよね。

結局今ライブ流行りですけどやっぱりライブの限界というのがあって、もちろんそのインターネット環境とかね、そういうのでアクセス、それなりのすべての人に、完全に開かれ

てると言い切れないし、それと時間が限られてる。

たまたまそこにいないとやっぱり参加出来ないっていうこともあるので、若干その広がりを持った、かといって、何でもいいからって、本当にインターネットをオープンにしてしまうと、集まった情報の出どころがわかんなくなっちゃうんで、これは多少工夫が必要かなと思ってもいます。ちょっとその辺は、ある意味技術的なことかもしれないけれども検討して、多くの市民の声を我々が受けとめて、しかもこれ一応ライブなので、ハーハーッて、紹介するだけでなくてですね、言ってみればラジオのパーソナリティのように、文献に対して、ただすぐレスポンスはその場でしながらみたいな、ちょっとそういうライブ感を持ちつつ。

その中から、第 3 回目こっちで 1 回やっていきましょうか。あるいはこの話については提言の答えでとか、そんなような、その場でのレスポンスをしながらっていう、ちょっとそんなスタイルかなと、と今ちょっと私イメージしています。

だから、ただ記録を見るだけじゃなくてやっぱりその場にね、参加できるような感じができたらすごくいいなって思っているところです。

そうなった時には、我々は、もう今日の残りあと 30 分で、一人一人の課題を考えなきゃいけないんですが。

何を持っていきましょう。渡辺さん何やりますか?

（渡辺）

何をやるかがまだちょっと、さっき言ってたライブで繋げる形でもし YouTube とか Zoom とか、中継ができる形が可能であればという形でイメージしたのが、まず松本市内の高校や大学とか、ちょっと時間帯も考えないといけないんですけども、高校とか大学とかも巻き込む形とか面白いじゃないかなあとか。

あとは、そもそもその YouTube の、この会議自体の知名度が上がらないと閲覧数も上がらないといじゃないかなって思ったところで、そこで増やすためには、インタグラムの広告とか、費用がかかるので可能かどうかわからないんですけども、そういったところで YouTube やりますだけだと何も繋がらないので、興味がある人にどうやって届けるかの部分も考えていかないといけないかなって思いました。すいません。答えにはなっていないですけど。

（香山）

知名度そのものでいうと、松本市ってすごく知名度はあるんですけれども。

ただ松本市のホームページをどれだけの人が見ているかっていうと、それは何とも言えないなということで、そういう点で言うとオフィシャルな発信っていうのはもちろん、これで松本市の公式のところに出てきますけれども、オフィシャルじゃない発信、今日こんなことをやりました的な非公式の話は、もうどんどん、我々がやっちゃってもいいんじゃないかと思ってます。

それは一人一人の委員の責任のもとで、もしもそこで炎上したらそこは上手に火を消しながらってことも含めてなんで、気をつけた発信の部分はありますが。こんなことでやってるってことを拡散してくっていうのはオフィシャルなラインだけではなくて、いいんだろうなという気はしますね。

そういうチャンネルづくり発信してくってのは一つの宿題として、もうちょっと専門的に振ったところで、2回目そうやって多くの意見を受け入れるに向けて、私はこんな準備をしたいということも決めていきたいんですが。
はい。何かあります？
（小山）
特に2つのキーワードがあるのかなと感じていたのが、香山さんが広げていて、個人のチャンネルとしてできるだけ広げていきましょうっていう部分って言うのはたぶん、これでスタートを切った。
一方で、もう一つのそのライブなりのいろんな意見、僕らが繋がらないところの意見をどうするかと。そこをどういうアプローチをして、それこそ三木さんだとか、どっかに出っ張って行って、適当な人の声を聞くっていうランダムサンプリングなやり方が、本当にそれが適切なのか。ちょっと今、悩んでますし。
一方でそうゆうライブに声を届けようとすると僕ら持ってるチャンネルって、やっぱりお友達ネットワークになっちゃう。そこを打破をするのに何がいるのか。
だから、お友達ネットワークによって僕らが宿題としてどういうふうにし、それこそ松本市の森林再生に対して言いたいことがあったら言ってみなさいっていうアプライがある。
もう一方のチャンネルをどう開いていく、そこは今のところアイテムもないなと思って悩んでます。そっちが多分最後考えていかなきゃいけない。
（香山）はい。
（三木）
松本市に20万市民がいます。24万。0.1%だと240人。次回の会議までに240人に話を聞きますか？
（小山）誰が？三木さん聞くの？
（三木）
いや、例えば1日20人づつ聞いて行けば10日で終わるわけだから、出来る気もするような感じはしていますけど。
次回の会議がいつ開催されるかにもよるんですけれども。1人2人から聞きましたぐらいじゃ、なかなか話しにもならないので、やっぱりある程度まとまったものをこんなご意見聞きましたよとか、こういう人いましたよとかが、やっぱり次回はそういうところからスタートさせたいなと思います。200人くらいなら何とかなる気がしてきました。
（香山）
なるほど。そういうことが得意なんですね。
私はそもそも松本に住んでないってのもあるんですけど、あんまり得意じゃない。インタビューしてもあんまり答えてもらえない。でも、それはできる人がやっていただけたらすごい面白いですよね。だからフィールドワークですよね。言ってみれば。
（三木）
そうですね。フィールドワークですし、別に私も得意ではないんですけど。得意なことだけしてると結局、これまでの想定の範囲内のことしか出てこなくて。言ってみれば木質バイ

オマスちょっと使いましょうみたいな、それ自身は正しいけれども、そうだよねぐらいの内容にしかならない。

せっかくね、松本市に呼んでいただいて、委員にもなったわけだから、私自身もこれまでやってなかったようなことにチャレンジしないといけないなとは思います。そういうふうな努力は、せっかく委員にしていただいたので、松本市民のためにやらないといけないなと思います。どこで何を聞けばいいのかってのは、ちょっとまた細部は詰めなきゃいけませんけれども、そのくらいの情報をもって次回の会議に挑みます。

（香山）

素晴らしい。じゃあできないことをね、それなりにチャレンジするということで言うと、私もあえてだから普通の市民じゃない人、業界の人への突撃インタビューを試みますかね。業界の人とも限らないけれども、これはっていう人には実は今こんなことやってましてって言えば、多分逃げられることもないと思うんで、そんな感じで、結局平均の声を集めることはできないけれども、いろんな声を集めてみる

実際、私の見えている松本市民っていうのは本当にごく一部でしかないので、せっかくこういう役目をいただいてますので、例えばだから、実をいうと、ここの皆さんともそういう意味ではゆっくり話したことがある方があまりいないんですよ。

何人かの方とは密接に、去年の提言書づくりで関わりましたけど、毎回こうやって事務局としてここに来ていただいてる方と、ちょっとそれぞれ突っ込んだ話っていうのを。本当はどうなんだ、これはちょっと困ったなと思っているかもしれないし、何かわくわくしてるのかもしれないし、何ともわからないですが。そんなような形で、せっかく立場役割上、座長ということもいただいてますので、ちょっと、一般市民というよりは、若干業界よりとか、行政寄りとか、そんな方達を取材したいと思います。

（渡辺）

声を拾うっていう形であれば、松本市内の飲食店とか、ゲストハウスとか、何度か行ってる場所とか、行ってない飲食店やゲストハウスとかもあるので、そういったところに顔を出して、知り合いじゃないところのお店に行って、声を拾って新しい声を聞くっていうのは、面白そうだと思いました。

（小山）

そうやってキャラクターが見えてくると、残りのところを取った方がいいのかな。（笑）

実際、私自身のネットワークからいうと意外と森林以外の人がいるなという自信はあるので。で、逆に言うと松本市ではない方、外から松本のイメージだけで語っている方に、松本ではこんな問題がありまして、これからどうしたらいいです？っていう完全に域外に向けたアピールをしても面白いのかなと

分野もたぶん、どちらかと言ったら森林とちょっとは関わっているけどもという私自身ＳＮＳの繋がりが多くて、森林に関わってる人達にもアプライはするけれども、ちょっと広いところから、遠くからの意見を聞いてみよう。

そうすると、どっちかといったら業界の方を中心に香山さん、市民の声は三木さん。地元の地域でお仕事されてる人達、多分若い人達は渡辺さん。でそうゆう風にしていくといろん

なキャラクターが見る松本の森林のイメージというのが、一応四方から聞き取れるっていうような気がするので、たぶんそのどんな聞き方をしてどうっていう、ある一定の聞き方、フォーマットをそろえながら、みんないろんな立場のところへばらまいていくことで、何かが戻ってくる。こういうやり方ができるんじゃないかという気がしました。

だから、香山さんと違う業界、要するに、完全に研究者仲間にバーッと投げてもいいので。そういうやり方もできるかなという気がしました。

（香山）

すごいことになってきましたね。こういう会議になるということを予想はしてなかったんですが、でも可能性としてはずっと考えてました。

つまり、会議というのはこの 4 人がここでやることではなくて外側に拡張していくタイプで。それが拡張したものがここへ戻ってきて、ここへ集まるのは、5 回しかないんだけども、ただ、今ねリアルタイムの情報交換はいつでもできるので、実は謝礼は出ないんですが、ここに座ってる以外の時間では。もうこの際それは問わないということで、事務局の方はそこをちょっと心配されてましたけど、それはしょうがない。

ということで、いろいろ動きができたら、その後面白い話で、そういう点で、ちょっとこの手の会議、実行会議って名前付いちゃってるんでしょうがない、そういうもんでしょう。

ちょっと開き直って、あんまり聞いたことないですね、会議の委員が次の会議のための宿題を持って帰って、なんかそれぞれ、課題のために何か動くということで、事務局の人たちは別にそれは、何が出てくるかわからないっていう感じでいるわけですが、2 回目ライブということができればそれも何とかやりたいと思いますし、そんな仕立てかな。ちょっと 2 回目の形が見えてきました。

そうなるとですね、日程ということも考えなきゃいけないんですが、あんまり近くじゃ無理だけど、あんまり先でも大変、およそどのぐらいな感じですか？

（小山）

2 回目までのは時間を食うので、1 回ちょっと置きたい。そこから、若干早めても、

（香山）

そうですね 2 回目まではちょっとここは時間がすごい大事なところで、多分一つの脚本づくりの中でも一番仕込みの部分になるので、言ってみれば取材じゃないですか、だからちょっとここは時間は必要なんだろうと思うんですね。

（小山）

ケツ決められちゃってる。

（香山）

だから、3、4、5 が結構たたみかけるように、特に 4、5 はすごい近いところなのか。

（小山）

もしかしたら 4 と 5 はちょっと開くかもしれない。2、3、4 はパタパタパタといって、じゃあ最後どうすんのっていう、5 はちょっと。

（香山）

本当はそれが正しいです。去年の会議の時はそこはみ出しちゃって、最後の会議が終わっ

た後に延長戦をやったんですよ。実際にはネットワーク上で、それはそれで、みんな大変だったので、そういう点では、延長戦じゃない形で

では4回目と5回目の間をちょっと時間をおいて、5回目でしっかりレポートをこんなレポートだっていう、そこの打ち合わせまでをちゃんとできた方がいいですよね。

（小山）

三木さん、年間スケジュールきつくない？

（三木）

いや、普通大体委員会の審議って2月ぐらいにやりますよね。3月に成果物を出すってなると2月くらいにはやっておきたい。

ちょっとあけるっていうと、例えば、後ろからいうと5回目が2月で、4回目が12月、その前の2、3、4はだから毎月やるみたいな感じになると、2回目が9月の下旬とか10月の初旬くらいっていうのが、一番無理がないのかな。

（小山）

多分そんな気がしますけど。

（三木）

そんな感じがしますけど、やっぱり 1 月っていうのはお正月だしいろいろあるし、大学だと、入試のシーズンとかいろいろありますんで。だから、9月下旬か10月の上旬くらいに我々の日が合うところを見つけて。年内は毎月やるということでっていうのが、スケジュールとしてはいいんじゃないですか。

（香山）

大体そんな感じで大丈夫ですか？

すいません。私が9月下旬から10月頭っていうところが、かなり流動的で。だからそこは他のものを押し分けてでも日程を作んなきゃいけないので、もちろんそうなんですが。ちょっと、今日はさすがに決められないんですけど、本当に近いうちに、1週間ぐらいの間で、お互いに日程調整をしながら、9月の終わりから10月頭っていうところに第2回という設定にしましょうか。

（小山）

ちょっと提案ですけど。可能なのか不可能か、ちょっとまた事務局と協議したいんですけど。2回目は下手すると、平日にやる必要があるか、そこも考えたいなと。ある程度そうやってライブ感もあって、人がいた方がいいよねっていうアイディアになってくると本当に平日でいいのか？場所もここでいいのか？森の中とは言わないけども、場所は市役所じゃなくてもいいんじゃないかと

（三木）

その時期にやる市の別なイベントの一角でも

（小山）

いやそう最高はそれなんだけど。なんかそういうのは面白い。それが別に森林とか環境じゃなくて、下手すると全然違う分野とか。

（香山）

いずれにしても、2回目の役割ってやっぱり、これ市民との繋がりを持ってるってことをアピールする部分があるんで、そういう点では平日ではなくて、多くの人が参加しやすい土曜とかで、場所も市役所っていう感じではない場所っていう、そういうことをイメージしてみると、すごく面白いと思います。この会議の存在をね、町に降ろしていくという意味にすごくなると思うので。時間的にまだあるので、そういう意味での準備というか仕掛けは、事務局と検討できると思いますので、もちろんこれがいいよってアイデアがあればまたあれですけれども。世の中、ちょうどその頃いろんなイベントも多いんですけど。それを、あえてぶつけていくのも面白い。そこの隙間に入れてもらえるなら。

（小山）

だから、大きなどこか会議室とかね、大きなイベント会場があったときに、横の小さな会議室にそういう怪しいブースを作ってもいいのかなって。

（三木）

だっていろんな人が見ていただければいいですけど、最悪この4人が座れる場所があればいい。どこだってどこの隙間にでも入れる。

（香山）

一応、事務局の皆さんの居場所がなきゃいかん。あんまりテントってわけにもいかない。

（三木）

やっぱりね、やるなら市民の方にちゃんと見ていただくとか、或いは認知していただくっていうのは、やらなきゃいけないですからね。隠れたところで知らないうちに決まってたみたいな感じになると一番よくありませんから

（香山）

大体2回目のイメージで大分固まってきた感じがします。

そうするとですね、今日どうでもやらなきゃいけないと思ったことが、一応、大体話ができたんですが、時間的には、若干まだあるんですが、せっかくなので何か外れた話題でもいいですが。いや外れたって言ったって、ここの範囲ではありますけど、何か話題提供していただけることありますか？

（三木）

市民が森林に関心があるのかないのかっていう話しをお聞きしたいと。一般的には無いだろうなと思われているわけですが。無いってことないんじゃないかという感じがします。それは繋がりの持ちようが、我々が今、従来考えている木材生産とか、そういうものじゃないってだけで、きっとあるんじゃないかなと思いまして。

委員の皆さんはもうご存知なんですけど、伊那市が今、伊那谷フォレストカレッジという事業をやってるんですよね。これからあんまり森林そのものに関わりのなかっただけど、ある程度関心持ってる人が、新しい繋がりを作って、あわよくば伊那市の方としてはそれを契機に、移住をしてもらおうという、そういうふうなやつなんですけど。

これ去年ごく短期間に宣伝して、受講生を集めたらですね、確か全国で 200 人ぐらい集まっちゃって、短い期間で。受講できるのは 40 人だったんで、なかなか 160 人はそこで切らざる得なかった。そのぐらいやっぱりこう短期間に沢山人が、そういう話題で集まる、面

白がってくれるっていうそういう時代にあるのかなという感じがしてます。
　それは多分松本市なんか、もっとそうで伊那市って言ってみればあんまり上伊那地域どこの市町村にとっても、知名度高くないんですけど、やっぱり松本市っていうのは、全国で誰でも知ってる町ですから、そういうふうなところで森林の話題のことをやってるぞっていうふうに言うとこれは世の中の関心もやっぱり、惹きつけざるを得ないものなのかなというふうに思って。そこは自信持っていいんじゃないかなと思います
（香山）フォレストカレッジ参加したんですよね？
（渡辺）（受講生として参加）パンフレットありますよ。
（香山）参加してどんな感じでした？
（渡辺）
　私はもともと木に興味があってフォレストカレッジ参加させていただいたんですけども、受講してみたらいろんな方が集まっていて、ライターさんだったりとか、料理家の方だったりだとか、普段自分が関わりのなかった人達も集まった中で、林業を仕事にしていて普段こういう仕事をしているよっていう話しを聞ける貴重な機会だったりとか、あとは、zoom で受講したんですけども、その中でグループディスカッションみたいな、四、五人に幾つか分かれて、テーマを決めてその中で答えを見つける授業ではなくって、みんなの気持ちを、意見出し合ったりとか共有したりとか、新しい発見を見つける場として開かれていたので、そういった意味では、いろんなお話が聞けたのも凄い新しかったですし、木の話を受講するのももちろん面白かったですけども、普段木に関わりのない人たちが、木って森ってこういうイメージとか思ってることの共有もできてすごい貴重な時間でした。
（香山）
　多分だからこの森林再生の一つ、森林再生に向かっていくいろんな実行するプログラムの中ですごく参考になるものですよね。そういう勉強する機会を、フォレストカレッジのような。今だからリモートとかで参加っていう、そういう制約でも同時に可能性でもあるみたいな形で凄く面白い時代になっていて。そういう点で言うと、松本の中でも、そういうものっていうのが、こういうことを通じて誰かが始めていくっていうことは、松本だけではなくてまさにその三木さんの話じゃないけど、日本全国に波及する力を持てると思うので。
　そんなことも今年の最後のレポートの中の一つのアイディアとして、松本だったらどんな学びをつくれるのか、面白いですよね。
（小山）
　ちょっとまだ今年のプランは届いてないですけど
　ここ何年かいろんな市町村にいろんなところに、コロナになって最近動けてないが、お邪魔させていただいて、私自身はそうやって森林に興味がないような方、全然違う分野の方と付き合いがあって、ここ４，５年前くらいから、妙なところから声がかかってくるというケースがけっこうありまして。一つが例えば世田谷区の認可園みたいなところから講演の依頼があったことがありまして。何しゃべったかって言ったら、どういうふうに昔の人たちが森とつき合ってたかしゃべってくれっていう話で、それがなぜか今ちょっと変な派生をしまして。まだ最終的には今年まで延びちゃってまだお話はしてないんですけど、近代文学の

作家が見た景色を語ってくれっていう訳のわからないオファーが来まして、さあどう答えてやるかと思って。

そういう繋がり方って、多分これから増えてくるんじゃないか。そんなようなことも含めていくと、ちょっと分野が広がるかなというところから私自身の声かけしようと、そういう分野の方そこで繋がった方にいろいろ聞いてみようかなと思ってます。

そういうことがこれからの松本ってそっちの意味ではすごく盛んな地域。文化財の方とお付き合いしていると、そういうものに対しての関心とか興味がすごく高い地域で、そっちの方々って、もう多分ターゲットですよね。もの凄い興味を、理解してもらえるっていう気はしてましたから。

ちょっと三木さんが集めてきた情報をうまく流すことで、そっち側にわっと広がってくるっていう波及効果があるんじゃないかという気はしましたけどね。

（香山）

という感じで、このメンバーで話していると、おそらく時間制限がなければ、いろんな話どんどん行くんじゃないかって気がしてきましたね。ただ、その部分とは別にこうやって、決まった枠の中で話ができるっていうことも非常に面白い部分で、その辺のどの辺にいくのかなっていう、ぼんやりした、まだねちょっと曖昧ではあるんですが、このチームがどんな話をしていくのかっていうその辺のチームづくりという意味でも、何となくできてきたのかなっていう 1 回目の会議は、もうすぐ終わるこのタイミングで今私はそんな風に感じていまして。

それぞれ皆さん宿題を持ち帰りにはなったんですが、今後ですね、公式な部分とは別に、非公式なコミュニティを作って密接に情報交換をしつつ、公式の部分は事務局の人も参加していただく形もあってそんな形でいろいろ動いていければと思います。

というわけで予定の時間、8 時半っていうところでもうあとちょっとというところで、もう最後引っ張ってもしょうがないので、今日のところの協議はここまでということにして最後に事務局の方からちょっと連絡があるっていうことなのでお願いします。

（事務局）

皆様お疲れ様でございました。

次回の会議は 9 月下旬から１０月上旬、また委員の皆様のご都合確認しながら、場所と開催方法について香山さんと相談をさせていただきながら決めていきたいと思います。

それでは、長時間にわたり、ご意見いただきましてありがとうございました。

以上をもちまして、第 1 回森林再生実行会議を終了いたします。

ありがとうございました。

（一同）ありがとうございました。